

[COMMUNION]

WEB:<http://www.nskk.org/tokyo/index.html>

E-mail: comm.tko@nsk.kk.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



第47号

(通巻1282号)

2018年11月4日

編集：広報委員会

委員長：渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園 3-6-18



9月29日(土) 合同堅信式 8教会12名(聖アンデレ主教座聖堂)



10月6日(土) 被造物を祝う礼拝(動物5匹が参列)



9月8日(土) 横浜教区主教授手式(写真中央 入江 修新主教)

特集 クリスマスに向けて、聖歌を豊かに

今回、降臨節、降誕節を迎えるにあたり、礼拝の大切な要素である聖歌について菊池泰子さんに原稿をお願いいたしました。

どうぞお手元に「聖歌集」を用意してお読みください。

「降臨節」「降誕節」の聖歌に思う

聖アンデレ教会信徒 菊池 泰子

今年もまた「降臨節」と「降誕節」を迎える季節になりました。街ではハロウィンが終わるとクリスマスモードに一変し、気の早いところではクリスマスソングも聞こえてきます。一方、私たちの教会では、「教会暦」の新しい暦（今年はC年）が始まる「降臨節第1主日」から主イエスを待ち望む準備に入り、そして「降誕日」「降誕節」に続いていくことになります。今回は、この2つの期節に歌う聖歌について、あれこれ思い巡らしてみました。

「聖歌集」には、降臨節20曲、降誕節38曲合わせて58曲の聖歌が載っています。これは「聖歌集」に収録されている聖歌580曲のうち1割に当たります。これらの聖歌には、長く親しまれ歌い継がれてきた聖歌と、この「聖歌集」から仲間入りした聖歌があり、主のご降誕という大切なメッセージを、歌の調べに乗せて届ける役目を担っています。

☆ 降臨節の聖歌

A～C年の降臨節4つの主日には、

「闇から光へ」「目覚めよ」「道を備える」そして「マリアへのみ告げと幼子イエス」などのメッセージが配置されています。

この世の生活に浸って眠っている私たちにとって、その眠りから覚めるのは容易なことではありません。降臨節になると、何度も「目を覚ませ」と呼びかけられます。数えてみたら「目を覚まして、起きなさい！」という意味の歌詞が入っている聖歌が6つもありました。

50番の2節「世の惑いを出で 目を覚まし見よ」や、思わぬときにいらっしやる主を「待ち望むごとく目を覚ませよ」と歌う53番の3節、バツハのオルガン曲などにも編曲されている58番「起きよ 夜は明けぬ」など、すぐに眠りこけてしまう私たちを、神は辛抱強く待ち続けることに気づかされます。

60番「ヨルダンのほとり」は、「悔い改めて道を備えるように」というヨハネの叫びを、落ち着いた曲調で歌い上げます。ご降誕日を前にして自分自身の信仰を見つめ直すようにと励ますこの聖歌は、私たちを洗礼を受けた時の初心に戻してくれるのです。

マリアの受胎告知の聖歌66番、67番

は降誕日間近に歌います。66番「み使い来たり告げん」は、スペイン、バスク地方のキャロルです。キャロルは、もともとは「踊り」を伴う民謡でした。軽やかなテンポで、最後の「グロリア」はひと息で歌いたい聖歌です。

最後に59番「おいでください」を取り上げます。原曲は「Nun komm, der Heiden Heiland」（「よぎ来ませ、異邦人の救い主よ」）という降臨節には欠かせない有名なコラールです。「聖歌集」では初登場になりますが、日本聖公会出版部から発行された



「新しいクリスマスカロル」（昭和40年12月）という子供向けの歌集の1番に「おいでください」という題で掲載されていた聖歌です。

第1節の歌詞は「おいでください イエスさまはやく きよいみははのふしぎなあかちゃん」左ページに楽譜、

右ページには空を飛んでいるような赤ちゃんのイエスさまが描かれています。私は、はじめの「おいでください」を見たとき、すぐにこの歌詞が浮かんできました。子供の頃、この聖歌を歌っていたからです。とくに最後の「ふしぎなあかちゃん」という言葉

が大好きだったことを思い出しました。

この歌集は、当時聖公会の礼拝音楽を牽引されていた故櫻井房江氏、故猿田長春氏、そして斉藤眞紀子氏が編集を担当し、5年の歳月をかけて出版に至りました。

現在は他教派に移られた斉藤さんに当時のことをお聞きしたところ、歌詞は斉藤さんのおじさまの深津文雄牧師（かいた婦人の村創始者）が、お子さんたちのために翻訳されたものだそうです。子供向けながらコラールの歌詞の意図は明解で、「ふしぎなあかちゃん」を繰り返すことによって、イエスさまは本当に神様のみ子なのだということが、子供にも自然に理解できる訳詞です。

「新しいクリスマスカロル」をお持ちの方は、この歌集をもう一度開いて59番と一緒に歌ってみてください。子供の頃の記憶と繋がって、「ふしぎなあかちゃん」との新たな出会いがあるかもしれません。

☆ 降誕節の聖歌

「聖歌集」では、「古今聖歌集」から継承した18曲に、伝統的に歌われてきた聖歌や現代の聖歌が新たに加えられて、38曲という数に大幅に増えました。「きよしこの夜」「荒野の果てに」「まきびと羊を」「神には栄え」など、世界中の人々に親しまれ、歌い継がれてきた聖歌はもちろんのこと、新たに収録された聖歌によって、クリスマス・メッセージは、さらに広がりを見せます。

78番「イエス うまれたもう」と101番「寒い寒い 冬の日に」は、「新しいクリスマスカドル」(前出)に入っていた聖歌で、2曲とも子供の作詞、作曲によるものです。子供たちと共に歌いたい聖歌は、他に75番、76番、77番などがあり、日曜学校の子供たちや家族連れの信徒と共に祝うクリスマスに大活躍します。

さて、まだ歌ったことのない聖歌を選びたい気持ちがあっても、なかなか取り入れられない教会もあるようです。そんな時は聖歌隊や数人の有志で、アンセムとして歌ってみるのも一考です。71番「世の成る前より」の原詞は4世紀頃に書かれたものに「DIVINUM MYSTERIUM」という美しい旋律が付いた古い聖歌、98番「星の光る 深い夜」は、今を生きる日本人の作詞、作曲による現代の聖歌です。どちらもユ

ニゾンで歌う単旋律の曲ですが、ご降誕の出来事を語るように歌う、アンセムにふさわしい聖歌です。

最後に、心に痛みを覚えながら歌う聖歌を取り上げたいと思います。ご降誕の出来事は、どの場面も神のみ恵みと祝福に満ち溢れており、聖歌も賛美と喜びのうちに歌いますが、ヘロデが幼子達をみな殺しにしたという出来事は、その喜びに影を落とします。

105番、107番の聖歌は、降誕後第2主日の聖書日課に対応するため、歌う機会が少ないという

こともありますが、この悲惨な災いを歌っているため、あまり用いられないのではないかと、かと思ふこともあります。



しかしこれは、後に起こる主イエスの十字架の死に重なり、ご降誕の真の意味を伝える大切な出来事として、避けて通ることはできません。降誕節が終わると主イエスの地上での生活と働きが始まりますが、その道は主の受難に続いていることを、私たちはすでに知らされているのです。

105番は、コヴェントリーキャロルと呼ばれる15世紀のイギリスのキャロルです。イギリスではよく知られているキャロルですが、「聖歌集」で初

めて掲載されました。「やすらかにねむれ 愛しの子よ」という美しくも憂いを帯びた子守唄から、幼子イエスが神から遣わされたことを深く受け止めるマリアと、受難の日に十字架の上の主イエスを見上げ悲しむマリアの思いが、重なって聞こえてくるようです。

106番の出典はスペインのフォークソングです。折り返しの「アラルー、アラメー」は、スペイン語圏で子どもを寝かせる時の言葉(「聖歌集」より)で、やはり子守唄になっています。105番は悲しむ母マリアの姿が表現

されていますが、106番では「ヘロデを恐れず、み母の腕に」抱かれる幼子イエスと、母としての慈愛と力強さを持つマリアの姿が浮かび上がってきます。メロデーも明るく、「ヘロデ

を恐れず」という歌詞から復活の希望をも感じさせるところが105番とは違った印象を与えます。この聖歌の伴奏譜はピアノ用(1譜)とオルガン用(2譜)があり、ピアノが聖堂に備えられている場合は、ぜひピアノ伴奏で歌って欲しい聖歌です。

107番では、1、3節はヘロデの災いについて、4節と5節はこの闇の中に存在する光、主の愛について歌っています。語りかけるような素朴なメロデーですが、この出来事にしっか

り向き合い、幼子イエスが歩む道に私たちも従っていくという決意を促す聖歌にも思えます。

以上、駆け足でしたが、こうして「降臨節」・「降誕節」の聖歌を見てみるうちに、どの聖歌も時に応じて歌って欲しい、と待っているように思えてきました。しかし教会の現場では58曲を満遍なく選ぶというわけにはなかなか行かないのが実情でしょう。久しぶりに教会に来る信徒が多いことなどを考慮すると、いつもの聖歌を選んでしまうということになるのかもしれない。もちろんお馴染みの聖歌もたくさん歌いたい、でも選択肢を少しずつ広げて、より多様な聖歌を歌うことで、クリスマスの感謝と賛美はさらに深まることになるのではないのでしょうか。それぞれの聖歌が伝えようとしているメッセージに耳を傾け、注意深く歌詞を読んで多様な選曲を心がけたところ

です。今年「降臨節」・「降誕節」の聖歌を丁寧に見てみませんか？お馴染みの聖歌も初めて出会う聖歌も、歌ったり歌詞を唱えたりして主のご降誕を待ち望むのも、ひとつの良い待ち方になるかもしれません。

(注：「古今聖歌集」では「聖歌」と「キャロル」は分類されていましたが、「聖歌集」では全て「聖歌」として収録されています。)

正義と平和協議会 講演会

「あなたたちも寄留者であったー在日コリアンと
バン格拉デシュ少数民族ガロの結びつきからー」

金 性済（キム・ソンジェ）牧師

7月21日に金性済牧師をお招きし、標記のタイトルで在日コリアンとしてのご自身の経験と、バン格拉デシュのガロ族と



出会った在日大韓基督教会名古屋教会の女性会の経験、さらにマイノリティとマジョリティという二項対立を越えた豊かな関係の可能性について、お話いただきました。以下にその要約をご報告します。

1 在日コリアンとしての献身への旅路

わたしは、日本に渡ってきた韓国人牧師の父と、在日2世の母との間に、在日2・5世として生まれました。24歳で堅信を受け、同志社大学神学研究科で5年間学び、在日大韓基督教会（KCCJ）の牧師になる準備をした。しかし、日本で生まれ育ったわたしは韓国語ができませんでした。1982年から韓国に留学し、韓国語を猛特訓してもらった。数ヶ月後、たどたどしい韓国語にもかかわらず説教を任された。後になって教会の信徒から、最初のころの説教は何を言っているのかわからなかったと聞かされた。彼らはそれまで忍耐してくれていたのだと思う。

その当時、韓国でつらかった経験が3つあった。1つ目は、教会の青年たちと映画を観たあと、地下鉄で老人から「日本人なのにへたな韓国語をしゃべってないで早く日本へ帰れ」と言われたことだ。わたしは思い切つてこう言った。「わ

たしは日本に住む韓国人です。日本には、あなたと同じ年頃の在日のおじさんがいるけれど、あなたのようなことを言わずに忍耐しています」。2つ目は、あるとき警官から職務質問を受け、所持品検査をされたときに、韓国語学習用の録音機を持っていたために、北から来たスパイと疑われて逮捕されたこと。

3つ目の経験はつらかったことでもあり、また気づかされたことでもある。あるとき覚えたての韓国語を使いたくて、延世大学の教授を訪ね、在日教会とマイノリティとしての生き方について思いの丈を語った。ところが、先生は「日本人と韓国人は民族的に違うが人種的には同じだ。少数民族は世界どこでも多数者に同化していく傾向にある。在日コリアンとしての生き方を自ら引き受けると同時に、同じ日本人として福音を広めたらどうか」と言われた。その言葉を聞いて、民族的

に守りに入らなくてもいいのだと気づかされた。それまで自分は在日であることを隠して生きてきたが、これからは少数民族として恥ずかしがらずに主とともに生きていこう。神がこの群れを必要だとみなしたら、長らえさせてくれるはずだと思った。自分は日本と韓国の谷間に落ちていたが、そのとき谷間の中から立ち上がったように思えた。

韓国からの帰国後、1983～89年の6年間、岡山教会の担任牧師を務めた。当時、日本では指紋押捺拒否に関する問題が起きていた。その後1989年から7年間、米国家リフォルニア・バークレーの連合神学大学院に留学した。その間、サンフランシスコ大地震、ベルリンの壁崩壊を経験し、世界が動くときは人も移民として動くことを実感した。それと並行して、イスラエル民族の重要な人びと、たとえばアブラハムなどは寄留者

であり、その視点なしに語れないと考え、それをテーマに1996年に学位論文『ゲール（寄留者）と古代イスラエルのアイデンティティ』を提出した。

米国から帰国して1996～2004年の8年間、川崎教会の担任牧師を務めた。米国に出発したときに日本はバブル絶頂期だったが、帰国したときにはバブルが崩壊し、地下鉄サリン事件が起き、右傾化していった時期でもあった。2004～2017年までの14年間、名古屋教会の担任牧師として務めた。2018年3月の第40回日本キリスト教協議会総会においてNCC総幹事に就任した。

在日コリアンとして初めての総幹事になった今、2つの視点が重要だと考えている。第1に、在日大韓基督教会の牧師としての視点だけではなく、教派を超えた団体としての広い視点である。第2に、日本で民族

の少数者、周縁者、忘れられた人として生きてきた経験をNCCで活かしていくという視点である。過去にさまざまな辛いことがあったが、自分は今まで訓練してもらっていたのだと考えている。

2 KCCJ名古屋教会女性会とナングリマ・ガロ・キリスト教会との出会い

在日大韓基督教会は1908年に宣教を開始した。1927年カナダ長老教会からL・L・ヤング牧師が名古屋に来て、1928年に名古屋教会の前身であった家庭集会は教会に格上げされた。その1年後の1929年に女性会が設立された。当時、大日本帝国の中で民族教会を敵視する動きがあった。1940年に名古屋教会は日本基督教会に吸収合併され、1941年に日本キリスト教団が設立されると、そこに加わった。

戦後、名古屋教会は名古屋

屋駅周辺の国際マーケットで働く在日コリアンのために託児所を開設した。それを皮切りに、女性会が中心となって社会福祉活動に関わっていった。1985年に現在の8階建ての教会を建設するときに1階から5階までを保育園と老人ホームとした。また野宿者のために毎週炊き出しも行ってきた。さらに、1988年に貧しい国々で教会を建てるために女性会はバザーを実施し、まずフィリピンのシブラン教会建設を支援した。

その後、バングラデシュで働く韓国人宣教師から情報を得て、少数民族ガロのために首都ダッカでナングリマ教会の建設を助けることになった。イスラム教徒ベンガル人が主流のバングラデシュにおいて、クリスチャンであるガロは民族的にも宗教的にも少数派である。当時の女性会会長である丁静子（チョンチョンジャ）さんは、日本の少数者としてガロの人たちに共

感を覚えると述べていた。2001年に丁さん率いる女性会の代表団がナングリマ教会建設記念式のためにバングラデシュを訪問した。しかし、その後2004年に仲介者が不在になり、ナングリマ教会とは音信不通になってしまった。



ちようどそのとき、ガロ女性への支援活動を行うリグリマ・ジャパンの上澤さんが、初めてナングリマ教会を訪れ、名古屋教会女性会と記された礎石を見つけ、帰国後すぐに女性会に、ナングリマ教会が交流再開

を希望していることを伝えてくれた。この2005年の出会いがなかったら、今のナングリマ教会と名古屋教会女性会の関係は途切れただただたっただろう。

その後2008年に、わたしはダッカのナングリマ教会を訪れた。バングラデシュの教会は、一般的にカトリックやバプテスマ、チャーチ・オブ・バン

グラデシュ（アングリカン所屬）などの教派に所屬しているが、ナングリマ教会は単立教会として、ガロ語の聖書や賛美歌、ガロ族の伝統楽器による礼拝を大切に守っていた。さらに、わたしは2010年にはガロ族の故郷である北部の村を訪問したときに、キリスト教が味方となって、かれらの身を守ってきたことを理解した。

3 今後の課題

2018年6月、わたしはドイツのベルリンで開

催された「平和をめぐる宗教者の責任」という国際会議に出席した。そこでバングラデシュNCC総幹事と出会うて意気投合した。彼が取り組んでいるロヒンギャ難民への支援や過激派集団への対応などの問題解決のために、今後、協働できる道はないかと模索している。

わたしは今、めぐり合わせの重要性を実感している。上澤さんとナングリマ教会や名古屋教会との出会いも然り、わたしとバングラデシュNCC総幹事とのめぐり合いも然り。NCCと聖公会とリグリマ・ジャパンが手を組んで、何か始められるのではないか、これらの出会いが未来への準備だったのではないか、出会いの中に神の深い恵みがあるのではないかと思う。バングラデシュとどう向き合うべきか、祈りながら考え、行動していきたい。

（在日大韓基督教会・日本キリスト教協議会総幹事）

『キープへの道』を読む

BSA理事 吉松英美

昨年2017年は、ポール・ラッシュの生誕120周年であった。それに合わせるように、エリザベス・アン・ヘンフィル著『キープへの道』（立教大学出版会）がこの3月出版された。訳者は、元立教学院院长でBSA評議員の松平信久氏と立教高校元教諭の北條鎮雄氏。

2段組で300ページもあるが、読後感のさわやかな本である。

ポール・ラッシュ



シユ本人のパーソナルなところもきめ細かく描写している。ポール・ラッシュに対する著者の愛情と敬意がよく表れていて、ポール・ラッシュ像が生き生きと浮かび上がってくる。

特筆すべきは、訳文の素晴らしいさ、読みやすさと充実した訳者注であろう。訳者がともに立教関係者であることにより、聖公会のことやポール・ラッシュを取りまく状況理解がすでに体の中に埋め込まれており、それが有形無形に著

書に対する理解と一体になって訳文に無理なく表れている。著者の女性的感性も無理なく訳文に感じられる。訳者のきめ細かい配慮が窺われる。

訳者注がこんなに充実している本はそう滅多にあるものではない。私は楽しんで読んだ。この訳者注だけでも、1冊の本を読んだことに値する価値があると思う。原文の間違いや著者の思い違いまでよく調べられていて、翻訳に臨

む訳者の良心と姿勢が感じられる。

それにしてもポール・ラッシュという人

は、実に面白い人である。枠に収まらない、はみ出たところのある人であるが、そこがポール・ラッシュのラッシュたる所以ともいえる。発想の豊かさ、企画力とそれを実行に移す行動力、付き合いの広さ、人を説得する人間的な魅力、そして時に子供のようなあどけなさを見せるポール・ラッシュ。誰からも愛され、信頼され、ポールのいるところには、常に人が集まる。稀有な人物

である。何よりも彼には希望があり、夢があり、目標に向かって全力を尽くす力があつた。そういうことをこの本は余すところなく描いてみせる。

『キープへの道』の原題には、『The Story of Paul Rutsch in Japan』という副題がついている。訳者は「昭和という時代は日本人にとってはもちろん、外国人にとっても起伏と動揺の激しい時代であつた。その時代をラッシュ氏は、雄大なヴィジョンと旺盛なエネルギーをもって歩み続けた。そのことから副題を敢えて『昭和史を拓いたポール・ラッシュ』とさせていただきたい」という。

ポール・ラッシュは、まさに「昭和という時代の申し子」であつた。

この評伝を読んで私が覚えるのは、ポール・ラッシュのBSAと今私たちが身を置くBSAの落差があまりにも大きいという戸惑いである。

私は、この本からポール・ラッシュの何を学ぶべきか、大きな宿題を抱えている。ご一読をぜひお勧めしたい。

第63回GFS全国研修会

講演会「江戸のキリシタン」

「信仰を持ち続けるとは」

7月29～31日の3日間、東京でGFSの全国研修会が開催された。

2日目の朝は聖餐式に引き続き高橋顕司祭の「江戸のキリシタン」についての講演会が開かれた。

配布された資料によると、



1549年のザビエル来日以来、キリシタンは加速的に増加し1614年には30万人に達したという。その影響を無視出来なくなった支配者たちは徐々に弾圧を強め徳川家光の時に決定的な禁教令が發布される。その後は多くのキリシタンが摘発され殉教していくが、その多くは処刑に際して喜んで死んでいくので、幕府は見せしめにならないと分かり、やがて密かに処刑するようになったという。

しかしそれ以前に諸大名をはじめ多くの人が洗礼を受け

キリシタンになっていたのです。

日本の社会や文化に大きな影響を与えた。たとえば「焼酎」「浮世絵」「茶道」「歌舞伎」「河童」「稲荷」など日本独自と思

われるものの中にもキリスト教の影響があるという。また、江戸のキリシタン史跡には、「鈴木森刑場跡（品川区）」「高山神社の切支丹灯笼（品川駅前）」「伝通院にある千姫の墓

の十字架の印とジョセフ・キアラ（イエズス会宣教師）の供養碑（文京区）」「切支丹屋敷跡（文京区）」などがあり、フィールド・ワークとして3日目にそのいくつかを訪ねた。

今回、高橋顕司祭の講演を聞いて感じたことは、私たちが「長崎・天草の潜伏キリシタン関連遺産」の世界文化遺産登録を喜ぶだけではなく、その人たちの信じ続ける強い思いこそ、私たちの信仰の遺産として受け取りたいということであつた。

（文責・広報委員会）

私たちの教会 [34]

ようこそ葛飾茨十字教会へ



当教会は、山口千尋司祭が退職後33年になりますが、いま多くの教会が直面している管理牧師体制をずっと経験してきました。主日礼拝は、日替わり定食のように、退職主教さんや司祭さんが入れ替わりに来てくださり、いつも新鮮な気持ちで礼拝に出席できたように思います。また、当番司祭さんのファンの方が礼拝に來られ、新しい交わりも生まれています。

礼拝出席者は20人前後で、隣接するケアハウス・サンピエール入居の方が数名居られます。このサンピエールで、聖書を読む会が月2回行われ、信徒でない方も参加されています。第2日曜日の礼拝後、管理牧師のケビン・シーバー司祭による「ひとくち聖書」でルカ福音書の講座が始まりました。何気なく読んでいた箇所が、特別な意味があることに気づかされています。昨年、転入された新会員の発案で、公演会や映画会などが企画され、サンピエールや近隣から、足を運んでこ

れる方ができました。いま当教会には、執事職を志す聖職候補生の下条知加子さん、また神学院入学を志す渡辺洋さんが与えられ、み心に適いますよう代祷を捧げています。当教会は、千代田線・常磐線「綾瀬」が最寄駅で、東



京教区で一番東にあります。当教会の前身である千住基督教教会は、1915年、当時伝道師の山口信太郎司祭による南千住での個人伝道の拠点として設立されました。周囲には放置された児

童が多くいたので、山口師は、この子供たちを養育することの方が大事だとの思いから千住保育園を一緒に創設しました。戦時の強制疎開令により、千住保育園分園（現在の社会福祉法人葛飾学園）のチャペルに引っ越し、

教会員はそれぞれ疎開したり移転して、礼拝出席が困難になる中、葛飾では、近隣の受洗者が増えていき、戦後、南千住に復興した際、葛飾で受洗した人たちは、千住基督教教会と別れ、学園チャペルを聖堂として葛飾茨十字教会を設立しました。1993年、葛飾学園と共同で、新礼拝堂兼葛飾学園チャペルを建設、現在に至ります。「茨十字」とは珍しい名前ですが、敗戦後の苦難の中、主の十字架を仰ぎ、主が冠られた茨の冠を我々も冠らせて頂いて、主のみ跡に従おうと覚悟を決めて名付けられたと聞いています。教会のモットー「証と奉仕」を歩む努力が続いています。

(佐々木國夫)

《信徒リレーエッセイ》

感謝

小笠原聖ジョージ教会

菊池 歌子

東京から南へ1km太平洋の南の島です。島を訪れた人が、写真を撮りたくなる程ステキな教会です。

牧師の小笠原愛作先生は、御高齢です。でも私達を導き、教会の全ての仕事を一人で頑張っています。ある朝自分で車を運転して「チョット医者に行つて来るネ」と言つたはずなのに、それから急変し生命に係わる程の状態におち入ってしまった。内地の病院に自衛隊機で空路緊急搬送と聞きかけつけてみると、酸素マスクをし、信じられない姿でした。私達が今出来る事、神様に全てを委ね先生を又この地に戻してくださいと祈つて祈つてヘリポートで見送りました。

御高齢にも拘らず、先生はあらゆる危険状態を突破しました。先生の気丈さ、使命感の強さ、スバライイ出来事。奇跡です。神様に感謝。

～ Grace Among Us ～

ピーター・ムサカ・バカルバ司祭

東京聖テモテ教会が里親サポーターとして支援しているアジア学院学生で、ウガンダ聖公会の、ピーター・ムサカ・バカルバ司祭が、8月4、5日東京聖テモテ教会を訪問され講演と聖餐式の説教をされ、アジア学院職員で聖アンデレ教会信徒の菊池あゆみさんが通訳を務めてくださいました。



主な活動の場であるヴィクトリア湖の島々は小舟という交通手段しかなく、インフラ整備も無いため政府の役人すら行きたがらず、教会にその働きを依存している様です。そんな中でピーター司祭はサーバント（仕える）リーダーとなるべくアジア学院で学んでいます。Grace Among Usはこの2日間のテーマで、神様と私たちの間のみ恵みと、孤児だった司祭が今は家族に恵まれ、学び、生活できることや司祭としての働き

すべてが教会を通して与えられた神様のみ恵みであること、日本と違いアフリカでは多くの人、ことに子どもや母親が十分な食事が摂れず亡くなります。日課のヨハネによる福音書第6章でイエス様は食の大切さを問うと共に御自分が命のパンだと言います。現在世界では多くの食物が廃棄されていますが5千人に食事を与えたイエ

ウガンダはここ20年ほど安定してはいませんが、健康問題、食、教育、その他さまざまな課題に直面しています。ピーター司祭はご両親の顔を見ることがありません。お父様を内戦で亡くされ、お母様は司祭を道端で出産直後に亡くなったのですが、このような事は未だに珍しいことではなく、感染症で亡くなる子どもたちも大勢います。学校も整備されておらず、木の下で学んでいる子どもたちも多いそうです。

ス様はその屑をも無駄にはせず、そして餓えた人、病氣の人、困難にある人のことを心に止めて忘れないようにと教えていますと、主日説教で、力強くお話になりました。実体験に基づく2日間のお話は心に突き刺さるようでした。

（東京聖テモテ教会 飯塚哲二）



世界の聖公会ニュース

アマゾン、カンタベリー大主教の批判を受けて賃金レベルを引き上げ（英国国教会、10月）

9月の英国の労働組合会議におけるジャスティン・ウェルビー大主教の演説で「生活を維持できる最低賃金を払っていない」と名指しで批判されたオンライン小売大手のアマゾンは、数週間後、英国におくつLWF (Living Wage Foundation) のガイドラインの水準以上に賃金を引き上げることを発表した。これにより恩恵を受ける従業員は約3万7千人。アマゾンは米国でも賃金引き上げを発表し、約35万人の従業員が恩恵を受けることになる。ジェフ・ベ

ちょっと聖書、ときどきユーモア（三十九）

1. こっちが本家？

信徒A「この間、スーパーに行ったら出血大サービスといって肉の大安売りをしていたけど、ボクは教会こそ本家の出血大サービスだと思ったね」

信徒B「えっ、どういうこと？」

信徒A「だって聖餐式でイエスさまの血と肉をいただくでしょ、まさにそれは大いなる礼拝（サービス）だからさ」

2. 神？を求める天使（エンジェル）

信徒A「テレビに“カミを求める天使”がよく出てるよね、見たことある？」

信徒B「えっ、そんなテレビ、見たことないけど・・・」

信徒A「いるじゃない、髪を求めるネタの『トレンディ・エンジェル』というマンザイ師が」

3. 少しでも軽く

ある女性「私はつねに十字架のネックレスを肌身離さずつけています」

牧 師 「はずす時はないんですか」

ある女性「1つだけあります」

牧 師 「どんな時ですか」

ある女性「体重計に乗る時です」

ゾスCEO「我々は批判に耳を傾け、我々がしたかったことは何か熟考した。そしてリードすることを決意した。」
マザーズ・ユニオン、洪水被災者に救援活動（ミャンマー管区、9月）
洪水の影響で10万人が避難生活を余儀なくされているミャンマー。パアン教区の若者達とマザーズ・ユニオンのメンバーは、家が流された人や避難できず孤立している人たちにボートで食糧、水、米俵を届けている。ボートが高

価なため竹で作ったボートを使っている。パアン教区各教会からの献金を資金として今後も救援及び復旧の活動を継続する計画。マザーズ・ユニオンは1876年に英国国教会のオールド・アスフォード教区においてあらゆる社会階級の母親を支援するために組織された。

次回 クリスマス号

12月23日発行予定